

大賞

みんな みんな助け合い

峡田小学校 五年 坂田 侑斗

柳田邦男先生、こんにちは。ぼくが、自信をもっておすすめする本は、

「百羽のツル」

という本です。この本を読むと、友情の事について学ぶ事ができます。

柳田先生は、だれかを助けた事がありますか。だれかを助けると、相手は、うれしくなります。家の手伝い一つでもすると、お母さん、お父さんも、喜びます。ぼくも、お手伝いをしたり、あるいは、してくれたりします。

百羽のツルは、こんな事をかいた物語です。病気の子ツルが落ちていく時、仲間が助けてくれました。九十九羽がみんな力を合わせて、子ツルをすくい、飛びたつて

いきました。ぼくは、このシーンが、一番好きです。一羽のために、九十九羽がまとまって行動するのは、すごい団結力があるなと思うし、子どもが落下しているにもかかわらずに、すぐ集まり、急ごうかできたなと思います。このようにして、子ツルを助ける事ができたのは、九十九羽が勇気をもち、そして、仲間を一羽でも落とすてはいけないという強い思いがあったからこそだと思えます。

ぼくが、この「百羽のツル」を読んできもんがありません。子ツルが落ちていくのに、自分自身で助けをよばなかったのはなぜか。ふつうだったら

「助けて！ 助けて！」

と言っはずなのに、無言で落ちていきます。なぜかと考えると、子ツルの思いが見えてきます。柳田先生はなぜだと思えますか。ぼくは、子ツルが重い病気で、

「もうだめだ…」

と思いがながらも、最後まで仲間といっしょにいたいと思っただからだと思います。もしも、自分たちの家で休んでいるとすると、きれいな雪がかかった山脈、かがやく湖が見られません。だから子ヅルは、最後に空を飛んできれいな湖を、一目見ようと思ったのだと思います。その後、仲間に助けられ、きれいな湖を見た事でしょう。じっくり考えると、他にも、いろいろな事が考えられます。自分が子ヅルだったら…仲間のツルだったら…と柳田先生も考えてみて下さい。

そして最後に、ぼくが本を読み終わったら、なみだが出そうなほど感どろしました。なぜかというところ、ツルたちの“あたたかさ”があるからです。ツルたちは、

「あともつちよつとだよ、がんばね。」

と声をかけました。それを聞いたツルたちは、元気づ

いたでしょう。あたたかさ、やさしさは、とても大切だと思います。柳田先生も、いつまでも、あたたかさ、やさしさを大切にして下さい。そして、「百羽のツル」も、ツルに思いをはせながら読んでみて下さい。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

『百羽のツル』で、病気の子ヅルが飛び続けられなくなって落ちていくとき、九十九羽のツルがみんな力で力を合わせて子ヅルを救い、飛べるように支えるシーンが、一番好きだという。そうですね。このシーンこそ、この作品が伝えようとしたテーマなのですから。

子ヅルが落ちていくとき、助けをもとめなかった理由を、坂田くんは光かがやく湖を見るために必死になって仲間についていこうとしていたからだろうと推測していますね。そうかもしれませんが、ぼくは、その見方もいいなと思います。あるいは子ヅルは

病気で弱って声も出せなくなっていたのではないかとも思います。それほど弱弱しくなっていたので、仲間たちが気づいて、声をかけるだけでなく、みんなで子ヅルに寄りそって支えてあげたのではないかと思うのです。

でも、助けを求めなかった理由はどうであれ、大切なことは、君も気づいているように、仲間たち九十九羽が全員で一羽の子ヅルを助けようと一体になって行動したことです。それから、自分が子ヅルだったらとか、九十九羽の一羽だったらと、立場を変えて考えることの大事さに気づいた点は、すばらしいです。

心のあたたかさというのは、やさしく見ているだけでは伝わらないですね。行動で示してはじめて、支えられる側にあたたかさが伝わるのです。もしクラスに仲間はずれにされたり、いじめられたりしている子がいたとき、ただ可哀そうだなと思って見ていられるだけではその子を救うことはできませんよね。仲間と一緒にあって、その子を守ってあげるにはどうすべきか相談し、行動を起

こすことで、あたたかい心が相手に伝わるのです。

君が大人になったとき、どんな社会にしたいと思うでしょうか。十人くらいの人々が貧しくつらい生活をしていても、九十人がほとんどお金を稼いで豊かになればよいのか、それとも十人の貧しい人々を救うために、九十人の人々が少しずつ我慢し合う社会にするのがよいのか。どちらを選びますか。